

宮澤賢治の聖い資糧

— 栄養療法の知的枠組についての研究 10 —

藤 井 義 博

Abstract

This study sought to provide a profile of Miyazawa Kenji that reveals itself against the background of his “luminous” philosophy on eating. It was his sensibility of how animals, such as fish, birds and beasts, destined to be eaten by humans would feel that made him vegetarian. His method in the face of phenomena was to begin “knowing” through intuition in his genuine heart, “mental sketches” as they were, instead of reasoning by means of concepts in his conscious mind. Miyazawa Kenji took intuition in his genuine heart for the real knowing of the principles of yin and yang, which are always in contrast with and complementary to each other, and operate in spiral throughout the universe. He declared his lifelong decision to provide all with sacred nourishment through the publication of the Morning of the Last Farewell. In this work he described his offering of her last food to his beloved sister with a prayer from his heart and a wish that he could offer up all his happiness so that her last food might turn into the ice cream of Heaven and soon bring to her and all others sacred nourishment. What we should learn from Miyazawa Kenji is not to revive the age-old conceptual reasoning of the principles of yin and yang to take the place of formal logic, but to identify in his writings a new philosophy that permits us to know the principles of yin and yang as intuition in one’s genuine heart through “mental sketches”.

1. はじめに

現代では日本を代表する詩人・童話作家として国際的に知られるようになった宮澤賢治 (1896～1933) は、生前に 2 つの著作を刊行したが、ほとんど世に知られることなく亡くなった¹⁾。賢治は 1924 年 4 月に心象スケッチ「春と修羅」を自費出版し、同年 12 月に童話「注文の多い料理店」を刊行した。「春と修羅」は、刊行のその年にダダイストの辻潤やアナキストの草野心平により激賞され、詩人としての賢治は、その死の 1 年後に画家・彫刻家・美術評論家・詩人の高村光太郎により称賛されたものの、ほとんど無名の地方作家にすぎな

かった。この賢治が実は内容の豊かな膨大な作品量を遺していたことが世に知られたのは、賢治の死の翌年 2 月、詩人の草野心平、高村光太郎、永瀬清子らを含む 21 名により東京の新宿で開催された「宮澤賢治友の会」の第一回の会合においてであった。会合に招かれた弟の宮澤清六が持参した遺品の大きな革トランクに一杯の賢治の原稿に参加者は圧倒された。その後、宮澤賢治全集が刊行され、賢治は次第に世に知られるようになった。賢治の「雨ニモマケズ」は、1940 年に形成された大政翼賛会が日本精神の詩的昂揚のために編集した詩集に採集された。また賢治の宗教思想の高さと深さに驚嘆した哲学者の谷川徹三は、「雨ニモマ

Sacred Nourishment of Miyazawa Kenji — A study on the paradigms of nutrition therapy 10 —. FUJII YOSHIHIRO (Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Science, and Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Science, Fuji Women's University, Ishikari, Hokkaido 061-3204).

ケズ」とともに宮澤賢治という人物を世に知らしめた。終戦直後の困難な時代に生きる子供たちを勇気づけるために、文部省は「雨ニモマケズ」の教科書掲載を望んだが、占領軍は定めた米の1日割当量を超える「一日ニ玄米四合」という表現に異議を唱えたため、弟清六の了解を得て「玄米三合」に改変して掲載した¹⁾。その後再び「玄米四合」に戻され、「雨ニモマケズ」は昭和30年代まで教科書に採択された。

本論は、食についての見解すなわち食事観という発光点より照射された光によって照らしだされ浮びあがる宮澤賢治のシルエットを記述する試みであった。

2. 宮澤賢治の生涯

宮澤賢治の生涯を、弟宮澤清六(1904-2001)による「兄賢治の生涯」²⁾の区分に従って記載した。この区分には年代と年齢の記載がないため、その区分における事象を宮澤賢治全集の年譜³⁾と照合し、各区分に年譜による西暦と年齢を付け加えた。また、各事象の発生時期についてもこの年譜に準拠した。各区分に記載した事象は、賢治の生涯が鳥瞰できるよう「兄賢治の生涯」および宮澤賢治全集の年譜より選択し採りあげた。

2.1. 幼年時代：1896-1908 (0歳~12歳)

父政次郎、母イチの長男として岩手県稗貫郡花巻町に生まれた。生後5日目の8月31日に、稗貫郡にも多数の家屋倒壊をもたらした陸羽大地震が発生している。同年の6月15日には、三陸大津波が襲来し、岩手県内死者は18,158人を数えた。賢治の叔父が写真に打ち込んでいて、津波の報が伝わるや夜道をかけて釜石に急行し、その惨状を撮影した溺死者の死体や災害のたくさんの写真アルバムがあり、幼児の賢治が時々それを見たりして災害への関心が特に深くなっていた。6歳で赤痢を病み隔離病舎に入院した。介抱した父は、赤痢に感染し、以後生涯胃腸が弱くなってしまった。

家業は、祖父喜助の開いた質・古着商であったが、その陰気な貧困者相手の家業が賢治に与えた影響も少なくなかった。父政次郎は若いときから仏典を好み、同志とともに中央から各宗の碩学・名僧といわれた人たちを呼んで仏教講習会を開いていた。その講習会に父に伴われて出席した賢治

は幼い割りに熱心に聞き、殊にあけがらすはひ鳥瞰師のそばにいて離れなかったと言われている。父政次郎がときどき「賢治には前生に永い間、諸国をたった一人で巡礼して歩いた宿習があって、小さいときから大人になるまでどうしてもその癖がとれなかったものだ」としみじみ話したものだが、たしかにそのように見えるところがあったと弟清六はいう。兄は家族といっしょに食事をするときでさえ、何となく恥ずかしそうに、また恐縮したような恰好で、物を噛むにもなるべく音をたてないようにした。また、前かがみにうつむいて歩く恰好や、人より派手な服装をしようとしなかったことなど、いずれも子供のときからというよりは、前生から持って生まれた旅僧というようなところがあったという。一時余り鉱物に凝ったので、家族から「石コ賢さん」というあだ名をつけられたほどであった。また、賢治は内村鑑三の高弟のひとりで高潔な教育者の照井真臣乳に小学2年生時に教えられている。

2.2. 中学生時代：1909-1914 (13歳~18歳)

賢治は盛岡中学校の入学試験に合格し、寄宿舎に入った。4年生の冬に舎監排斥運動に加わり、寄宿舎を追放され、盛岡の北山の清養院や徳玄寺に下宿し、報恩寺で尾崎文英について参禅した。進学の望みもなく、中以下の成績で卒業した。

卒業と同時に岩手病院で蓄膿症の手術をしたが、原因不明の熱がつづき、発疹チフスの疑いで2ヶ月の間入院した。その間一人の同年の看護婦に秘かに心を引かれた。

ようやく病氣も直って帰宅し、店の番をしたり養蚕の桑つみを手伝ったりしたが、すぐれない顔で悲しい歌ばかり創っている賢治を見て、両親とも商売はとて性に合わないと考え、盛岡高等農学校に進学させる決心をしたという。

受験勉強に取りかかった賢治にその夏特筆すべきことが起こったと清六は述べる。それは父に送られてきた浄土真宗の島地大等の編集した国訳妙法蓮華経を賢治が読んだことである。その中の「如来寿量品」を読んだときに特に感動して、驚喜して身体がふるえて止まらなかった。以後賢治はこの経典を常に座右に置いて大切に、生涯この経典から離れることはなかった。

2.3. 農林学校時代：1915—1918（19歳～22歳）

盛岡高等農林学校農学科第二部（後に農芸化学科と改称）に主席で入学し、寄宿舎自啓寮に入った。同年、妹トシが日本女子大学家政学部予科に入学した。学校では関豊太郎より地質や土壌について教えを受けた。賢治が3年生の1917年に弟の清六が盛岡中学に入学したために、賢治は寄宿舎を出て従兄弟たちと清六といっしょに玉井郷方家に下宿した。賢治の机の上にはいつも化学本論上下と国訳法華経が載っていたと清六は述べる。卒業も近くなり、賢治は沢山のらつきょう漬を買って来て、がりがりかじりながら「こいつはなかなか頭を使うときはいいもんだ」などと言って「腐植質中の無機成分の食物の価値」という研究の卒業論文を書いていた。1918年、盛岡高等農林学校を卒業したが、地質や土壌を研究するために研究生として学校に残り、関豊太郎の指導の下に稗貫郡の土性調査をはじめた。

1918年6月30日に岩手病院で診察を受け、「肋膜」と診断される。これは後年賢治の命をうばうことになる結核の初診断であった。7月4日に賢治は実家に帰ったが、河本義行より保坂嘉内宛ての葉書によると、「私のいのちもあと15年はあるまいと。淋しい、限りなく淋しいひびきを持った言葉を残して汽車に乗った。」とある。この自らの予言を実現するかのように、15年後に賢治は結核で命を落とすことになる。8月に賢治が童話「蜘蛛となめくぢと狸」と「双子の星」を読んで聞かされたことをその口調まではっきり清六はおぼえているという。「処女作の童話を、まっさきに私ども家族に読んできかせた得意さは察するに余りあるもので、赤黒く日焼けした顔を輝かし、目をきらきらさせながら、これからの人生にどんな素晴らしいことが待っているかを予期していたような当時の兄が見えるようである。」という。12月に日本女子大学に行っている妹トシが突然東京で肺炎になり、賢治は母イチといっしょに上京した。一生懸命看病をしてやっと翌1919年2月に小康を得て、賢治は帰宅した。これはその後4年を経ずしてトシの命を奪うことになる結核の発症であった。なおトシは同年3月に日本女子大学を卒業して帰郷し、1920年9月より母校花巻高等女学校の教諭となった。

2.4. 家出：1919—1921（23歳～25歳）

1919年の東京からの帰宅後の2年間は、賢治は嫌々ながら家の手伝いをしたり、ひどい煩悶をしながら本を読んだりしていたが、菜食を1918年以來つづけて、あるときは寒行をしながら、法華経の道を強く実行しようとしていた時代で、内に燃えるような宗教と芸術の激しいほのおを燃やし続けていた時期かと思うと清六は述べる。

1920年11月に法華経信仰団体の国柱会に入会して布教につとめた。度々父政次郎に改宗を切望するあまり、はげしく宗教論を繰り返した。賢治は家中を法華経に帰依せしめて、正しい宗教に改めたいという理由から、1921年1月23日に突然旅費だけを持って、東京に家出した。そして4月初旬に父政次郎が上京して賢治といっしょに比叡山や伊勢や奈良を旅行するまでの間、賢治は爆発するような勢いで童話を書いた。そのときのことを小学校の恩師に次のように話したという。「人間の力には限りがあります。仕事をするのには時間がいります。どうせ間もなく死ぬのだから、早く書きたいものを書いてしまおうと、わたしは思いました。一ヶ月の間に、三千枚書きました。そして、おしまいになると、原稿のなかから一字一字飛び出して来て、わたしにおじぎするのです。……」

1921年9月に妹トシの咯血の報せに賢治は驚いて帰宅したが、このとき上京中に書いた童話の原稿を大きなトランクにいっぱいに詰めこんで、それを持って帰ったのだという。

2.5. 農学校教諭時代：1921—1926（25歳～30歳）

1921年12月に賢治は後に県立花巻農学校となる稗貫群立稗貫農学校の教諭となった。その頃は外国からレコードが入り始めたところで、新譜が入荷するたびに注文して、まるで渴いていたものが水をのむように、何回も何回も同じ曲を繰り返して聞き、しまいには蓄音器のラップに頭を突っ込んで恍惚となっているという具合であったと清六は述べる。

1922年11月27日、妹トシが亡くなる。翌年8月、賢治は青森・北海道経由で樺太旅行を行なった。これは「オホーツク挽歌」に描かれたように、亡くなった妹トシとの交信を求めての旅であった。

1924年4月、「春と修羅」を自費出版する。5月に修学旅行で生徒を引率して北海道に行く。12月

「注文の多い料理店」を刊行する。

1926年3月に賢治は花巻農学校を退職する。退職の理由について清六は、「生徒には農村に帰って立派な農民になれと教えていながら、自分は安閑として月給を取っていることは心苦しいことだ。自分も口だけでなく農民と一しょに土を掘ろう。というのが、彼の性格として当然であったろうと私には思われる」と述べる。

2.6. 羅須地人協会時代：1926—1930（30歳～34歳）

1926年4月、羅須地人協会の活動を開始する。そこでは、農学校で教えることを、できるだけ縮めて実際的にし、短時間でさまざまなことをやろうという意気込みであり、自分で起稿した「農民芸術概論」を講義したり、いろいろの楽器を持ちよって音楽を練習したり、物資の交換などもやった。

1928年3月には花巻の町の中や近くの村に肥料の相談所を設けて、医師が処方箋を書くように田畑の肥料を計算する肥料設計をはじめた。賢治の教えた所は成績がよかったので、翌1929年6月までに二千枚の設計を行ったと言われている。1928年8月に両側肺浸潤により40日間熱と汗に苦しむ。同年12月には急性肺炎を併発し、1929年4月には2時間咽頭からの出血が止まらなかったりした。同年9月から12月の間は病勢がやや衰える。

2.7. 砕石工場技師：1930—1931（34歳～35歳）

1930年4月、粉碎した石灰石を基本とした肥料の製造と販売を行なう東北砕石工場主の鈴木東蔵が来訪した。病気も次第に快方に向かって来たので、賢治は決心を固め、1931年1月に東北砕石工場技師となり、広告や印刷物を文案して発送したり、農業会や肥料屋や米屋を回って注文をとったり、金の工面までした。しかし肥料の注文が無くなる冬の間の工場経営を心配し、米の精白に搗粉として石灰粉を用いることと人造壁材料を造って販売することを賢治は考えた。そして同年9月に花巻で作らせたタイルの見本をつめた重いトランクを持って上京するとたちまち発熱して臥床してしまった。賢治はいよいよ運命の時が来たと考えて、1931年9月21日に父母あての遺書、弟妹たちあての告別のことばを書いた。奇しくもそれは2

年後に死んだ月日と同じ9月21日であった。9月末、賢治は花巻に到着し、家に着くやいなや臥床してしまった。

2.8. 臨終：1931—1933.9.21（35歳～37歳）

1931年9月に帰省してからの2年、賢治はずっと病床にあって、詩や童話や文語詩を書いたり、頼まれればそれを発表したり、肥料の相談の返事を書いたりした。東京で遺書を書いてから、賢治は一冊の手帳にいろいろなことを書きつけて、遺書といっしょにトランクのポケットに入れて置いた。「雨ニモマケズ」は、1931年11月3日にこの手帳に書かれた。

1933年3月3日に、三陸一帯大地震が発生し大津波が襲来した。この年は大変な豊作で、9月17日から19日の花巻の氏神の祭りは大勢の人々が出て盛りあがったという。祭りの最後の晩には、賢治も鹿おどりを見たり、門の前に出て御輿のお迎えをした。20日夜7時頃、肥料の相談に来た農家の人と長く話し込んでいたが、そのためか翌21日にはひどい熱が出た。20日の晩は余り苦しうなので清六が二階の賢治のそばで寝たが、「この原稿はみなおまえにやるから、若し小さな本屋からでも出したいところがあったら発表してもいい。」と言ったという。2、3日前、父政次郎と話したとき、「この原稿はわたくしの迷いの跡ですから、適当に処分してください」と言った。またあるとき母には「この童話は、ありがたいほとけさんの教えを、いっしょけんめいに書いたものだんすじゃ。だからいつかは、きつと、みんなでよこんで読むようになるんすじゃ。」と話したことがあった。

21日の昼近く、二階で「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」という賢治の高い声がするので、家中の人たちが驚いて二階に集まると、咯血して顔は青ざめていたが合掌して御題目をととなえていた。父は「遺言することはないか。」と言い、賢治は方言で「国訳妙法蓮華経を一千部おつくり下さい。表紙は朱色、校正は北向氏、お経のうしろには『私の生涯の仕事はこの経をあなたのお手もとに届け、そして其中にある仏意に触れて、あなたが無上道に入られますことを。』』ということを書いて知己の方々にあげて下さい。」と言った。父政次郎はその通りに紙に書いてそれを読んで聞かせてから、「お前も大した偉いものだ。後は何も言うことはない

か。」と聞き、賢治は「後はまた起きてから書きます。」と書いてから、清六たちの方を向いて、「おれもとうとうお父さんにほめられた。」とうれしそうに笑った。それからすこし水を呑み、からだ中を自分でオキシフルをつけた脱脂綿でふいて、その綿をぼろっと落としたときには、息を引きとっていたと清六は述べる。9月21日午後1時30分であった。

3. 資料と方法

宮澤賢治の著作のテキストとして、「新校本宮澤賢治全集」全16巻、別巻1巻(筑摩書房、1995～2009年)を用いた。とりわけ、「雨ニモマケズ」(第13巻、pp.521-525)、「ビザテリアン大祭」(第9巻、pp.208-245)、「1931年極東ビザテリアン大会見聞録」(第10巻、pp.338-343)、「春と修羅」(第2巻、pp.7-220)の中の「序」、「無声慟哭」、「風景とオルゴール」および賢治による書簡(第15巻)を中心に、宮澤賢治の食に関する見解や表現を採りあげた。

4. 賢治の菜食主義

4.1. 菜食主義の決意

1918年5月19日、親友の保阪嘉内あての書簡において賢治は「私はしかしこの間、からだが無暗に軽く又ひつそりとした様に思ひます。私は春から生物のからだを食ふのをやめました。」と述べ、菜食を始めたことを告げる。「けれども先日『社会』と『連絡』を『とる』おまじなゑにまぐろのさしみを数切たべました。又茶碗むしをさじでかきまわしました。」と述べていることから、賢治は周囲との社会的関係を維持する必要上、ときには少々の肉食を辞さなかったことが窺われる。賢治には、食われる魚鳥の心持が感ぜられた。それゆえに、「魚鳥が心尽しの犠牲のお膳の前に不平に、これを命と思はずまいのどうのと云ふ人たちを食はれるものが見てあたら何と云ふでせうか。」という心情が親友を前に吐露されている。そして「われらの眷属をあげて尊い惜しい命をすててさきげたものは人々の一寸のあわれみをも買へない。」と、食われる魚鳥の心持を語る。さらに「私は前にさかなだつたことがあって食はれたにちがひありません。」と述べる。この仏教的輪廻の生命観は

後述する「ビザテリアン大祭」の中で「我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である。」「恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ。」という「私」の主張につながる。

菜食主義の賢治が菜食を見直す事象があった。関徳弥あての1921年8月10日付けの書簡において、7月始め頃から25日頃へかけて一寸肉食をしたと賢治は記している。その第一の理由は、「私の感情があまりに冬のような工合になってしまって燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つた」ことであつた。そして「断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた」が、肉食をしたって別段感情が変わるでもなく、むしろそれをきっかけにして脚が悪くなつてしまい、今はもうすっかり逆戻りをしたと述べる。

4.2. 「雨ニモマケズ」の祈り

賢治は、1931年9月21日に上京するとたちまち発熱して臥床してしまつたとき、いよいよ運命の時が来たと考えて、父母あての遺書、弟妹たちあての告別のことばを書き、一冊の手帳にいろいろなことを書きつけて、これらの遺書といっしょにトランクのポケットに入れて置いた。「雨ニモマケズ」は、1931年に11月3日の日付のもとに、この手帳に記されたものである。これは詩というよりも自分への祈り(サウイフモノニワタシハナリタイ)であると思われる。

その祈りは、まず丈夫な体と、生活からの喜びを持つことへの祈りで始まる。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ臆ラズ
イツモシヅカニワラツテキル

続いて、食への祈りが記される。

一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ 野菜ヲタベ

さらに傾聴のできる利他的理性的状態への祈りと、自然の中でのつつましい居住への祈りが記さ

れる。

アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

次いで利他的実践ができることへの祈りが記される。

東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
北ニケンクウヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ

最後に、でくのぼうであることへの祈りが記される。

ヒドリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

「雨ニモマケズ」は、賢治の願う丈夫な体をつくる礎となる食の内容を示している。賢治がこの祈りを記したのは、遺書や告別の言葉を書いた後であり、死ぬまでずっと病床にあったときである。玄米と野菜だけの菜食主義の食により丈夫な体をもつことを祈っていた。

臨終期の賢治が「玄米四合」を食べられることをなぜ祈ったのだろうか。その理由を、この時期の彼の体質に基づいて推定してみる。1932年6月1日の森佐一あての書簡で、賢治は食養生への注意を感謝して、自らの食摂取状況を述べている。それを箇条書きにすると次のようになる。

①間食はほとんどしないで、水を飲み、海藻はつ

とめて摂っている。

②いくら努めても性分がよく噛むことができない。ちょっと調子が悪くなるともう上のそらで物を食べはじめる。

③動物性のももの粕をたべると必ず工合がわるい。「栄養品といふやうなものはみんないけません。」「十二月から四月までは卵もいけませんでした。牛乳は一口呑んでも一日むっとしてゐます。」と記す。

④母の里から宣伝されたので、いままで3年玄米（七分搗）を家中で食べてきたが、実につらく何べんも下痢した。その原因が、学者が半分の研究で本当の生活へ物を言っただけの加減な玄米食によることに気付かなかった。しかし気付いても、もう寝ていて食物のことなどかれこれ云えない状態である。最近モミガラのため義弟が盲腸炎をやったのでやっとなめてもらった。

このように賢治はこの時期、主義として菜食を貫いたというよりも、動物性食品を受けつけない体質にあったこと、家中の健康を願って玄米（七分搗）食が採用されていたことにより、結果的に菜食になっていた側面もあると思われる。しかし玄米食により3年間下痢していた原因を、賢治は玄米食の方法がよくなかったことに帰するものの、玄米自体を糾弾していないことが注目される。それゆえに「玄米四合」の意味は、それで丈夫な体をつくるためではなかった。もはや病床を離れることのできなくなった賢治が、残された時間のなかで最後の力をふりしぼって自らの使命をまっとうしようと、「玄米四合」を食べても下痢しない程の丈夫な体であることを祈ったのだと思われる。

4.3. 「風景とオルゴール」の真剣さ

賢治は、食われる魚鳥獣の気持ちだけでなく、伐られる樹木の気持ちも感じる事ができた。それは「風景とオルゴール」における以下の「心象スケッチ」より知ることができる。その表現の深刻さは、後述する「ビザテリアン大祭」の中の「恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ。」という「私」の主張を髣髴させる。

わたくしはこんな過透明な景色のなかに
松倉山や五間森荒っぽい石英安山岩の岩頸から
放たれた剽悍な刺客に

暗殺されてもいいのです

(たしかにわたくしがその木をきったのだから)

月はいきなり二つになり

盲目した黒い暈をつくつて光面を過ぎる雲の一群

(しづまれしづまれ五間森

木をきられてもしづまるのだ)

5. ビジテリアン大祭

5.1. ビジテリアン大祭の解題

生前には発表されず、遺稿の中から発見されたものである。弟の清六は、1930年頃、専門の医師達の機関紙の「東北医事新聞」に記載されていたその頃としても風変わりな記事が今も記憶に残っていると述べている。⁴⁾ その記事は宗教家と科学者とその他各国人を網羅した一団が、動物質の食品を排撃することによって世界の食料問題にある革命をもたらしかつ世界に分布する強力な団体を結成しようとする意図を持って、最近花巻温泉で秘密の会合を行ったというというような意味をもったものだった。そしてその記事は、今になっていろいろ想像して見ると、宮澤賢治が変名で少し冗談も交えて投書した作品を、その新聞の編集者が、意識してかまたは知らないでか、事実らしく報道したのではないかと思われる節が多いのであるという。この記事を清六が家の中で話題にしたときも、賢治は全然知らないような顔をしていたようだったが、その後、遺稿の中から出て来た「ビジテリアン大祭」とその異稿を見るに及んで、その大体を察することが出来たので可笑しくてたまらなかったと述べている。

実際、「ビジテリアン大祭」は後で別の形で書き直すつもりであったと見えて、原稿の冒頭に、「花巻温泉にて、極東ビジテリアン大祭挙行と書き直すこと」と付記されている。そして清六はその書き直すつむりの原稿の幾分かを発見して公表している。⁴⁾

5.2. 賢治による菜食主義者の分類

清六が公表した「極東ビジテリアン大会秘録」(新校本宮澤賢治全集では「1931年極東ビジテリアン大会見聞録」⁵⁾として収録されてる)に示された菜食主義者の分類を図に示した。この図解により、賢治はビジテリアンの2つの精神と3つの実

行方法の要点と相互関連性を示している。同情派は、「喰べられる方になって考へて見ると、とてもかあいさうでそんなことはできないと云ふ思想」であり、予防派は、「じぶんの病氣予防のために、なるべく動物質をたべないといふのであくまで利己的な連中の集まりである」。大乘派は、「もしある動物がほかのたくさんの動物の敵であるときはそれを食ってもいいといふ」思想である。

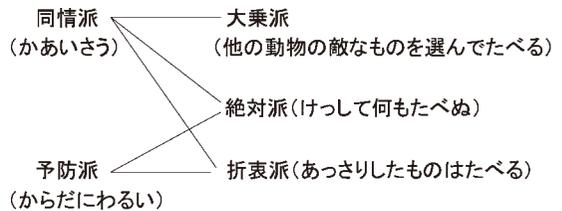


図 菜食主義(極東ビジテリアン大会秘録の図に基づく)

5.3. ビジテリアン大祭の構成

「ビジテリアン大祭」は、北米のニューファンドランド島の山村ヒルテイの同情派の長老であるデビス司祭長の教会で開催された万国の大祭であり、それに日本の同情派を代表して列席した「私」によるその顛末記という構成の作品である。「私」のほか北米にやってきた参加者としては、地学博士を団長とするトルコからの6人と折々に仕掛け花火を陽気に揚げる中国人の「陳氏」が描かれる。このように地元北米の主催者側の参加者を除いて、北米にやってきた同情派は東洋人ということになり、ヨーロッパからの参加者は描かれていない。

大会が始まる前に、菜食主義を糾弾する桃色のパンフレット(マルサスの人口論を考慮しない偏狭で非文明的なベジテリアンの排除を訴える)が配布される。さらにシカゴ畜産組合の車が来て、4種類のビラを撒いてゆく。鼠色のビラは、自分で可哀そうだと思うだけの偏狭で非学術的なベジテリアンの排除を訴え、黄色のビラは、生物分類学的に動植物の連続性を知らない偏狭で非学術的なベジテリアンの排除を訴え、茶色のビラは、歯の比較解剖学上人類には一番自然な混食をしない偏狭で非学術的なベジテリアンの排除を訴え、白色のビラはベジテリアンが食べない魚を煮て圧搾してできる魚油と魚粕を使って野菜を育てたり家庭でのエネルギーとして用いられている事実を直視することを訴える。

大祭では、「私たち」対「異教徒・異派」の間で

「論難反駁」すなわちディベートが行われる。以下に「異教徒・異派」の論点を箇条書きにする。

- ①植物性食品と動物性食品では消化と享樂における優劣がある。
- ②動物は一種の器械である。
- ③地球上の人類の食物の半分は動物で半分は植物である。
- ④動物と植物の間には確たる境界がない。
- ⑤歯の比較解剖学の見地から、人類は混食しているのが一番自然である。
- ⑥大地、自然の中の出来事はみな神の摂理、み恵み、善である。
- ⑦我らの心象中には微塵も善の痕跡を発見することができない。

最後の⑦のテーマにおける異教徒席からの演説のあまりにひどい語に「頭がフラット」した「私」が、まるでよろよろ出て行き、みんなを見下して演説を行った。この結果、異教徒席・異派席もしいんとしてしまって誰も演壇に立つものがなく、みんなあっけなく改宗してしまった。

ところが、最後に、今日の異教徒席・異派席からの「論難反駁」は、このお祭を賑やかにするために祭司次長から頼まれたしばいであったことが明かされる。「陳氏」は笑いころげ、哄笑歓呼拍手は祭場も破れるばかりであったが、「私」はあんまりこのあっけなさにぼんやりしてしまい、あんまりぼんやりしたので「愉快的ビヂテリアン大祭の幻想」はもうこわれましまつたので、「どうかあとの所はみなさんで活動写真のおしまいのありふれた舞踏か何かを使ってご勝手にご完成をねがうしだいであります。」で終わる。

5.4. ビヂテリアン同情派と予防派

ビヂテリアン同情派と予防派は、「食」という言葉のもつ2つの側面に対応している。「食」には、一方では、食育、食養という言葉が示すように、養生、栄養という意味がある。他方では、侵食、侵食、日食、月食という言葉が示すように、「食」には侵すという意味もある。侵すという意味の「食」は、食べられる側の視点に立つ意味であり、栄養という意味の「食」は食べる側の視点による意味とすることができる。食べられる立場に立ってかわいそうと感じるビヂテリアン同情派は、「食」の侵害の側面に思い遣り、体のためを思う予防派は、もっぱら「食」の養生、栄養の側面を考

えている。

「食」に2つの意味があるなら、そして「食」を通じて思い遣る心を育もうとするならば、食育においては「食」を食べられる立場から捉えることも大切である。なぜなら「食」の大切さに対する国民の意識が薄れている大きな要因として、自然の恩恵の上に貴重な食料生産が成り立っていること、「食」という行為は動植物の命を受け継ぐことであること、そして、食生活は生産者をはじめ多くの人々の苦労や努力に支えられていることを実感しにくくなっているという背景があると考えられているからである。しかし生活習慣病が蔓延する現代では「食」はもっぱら栄養として、いわば予防派の立場から議論されている。食育の推進に当たっては、心身の健康に直接関わる知識等を身に付けるだけではなく、様々な体験活動等を通じて自然に国民の「食」に関する感謝の念や理解が深まっていくよう配慮した施策を講じるものとされている。食べられる側の視点がある宮沢賢治の童話は、食育との関連において見直される必要がある。

5.5. ビヂテリアン大乘派

「極東ビヂテリアン大祭秘録」（「1931年極東ビヂテリアン大会見聞録」）では、「ビヂテリアン大祭」では明確に定義されていなかったビヂテリアン大乘派の内容が具体的に示されている。その思想の要点は以下に示す3点である。①他の動物が可哀そうだから食べない、②ほかの沢山の動物の敵である動物は食べてよい、③食べる側も、もし需要があれば絶対に食べられることを避けてはいけない。

賢治の童話「注文の多い料理店」では、都会のハンターが入った山奥の西洋料理店は、来客に西洋料理を食べさせるのではなく、来客を西洋料理にして食べてやる家として描かれている。山奥で食べる物に事欠く野生動物たちが、都会からやってきたハンターを自ら料理してもらって食べるという構想は、ベヂタリアン大乘派の「もしある動物がほかのたくさんの動物の敵であるときはそれを食ってもいいといふ」思想の適用である。言い換えると「もしたくさんのいのちのために、一つのいのちが入用なときは、仕方がないから泣きながら食べていい、そのかわりもしその一人が自分になった場合でも敢えて避けない」というべ

ベテリアン大乘派の思想を下敷きとして構想されている。「注文の多い料理店」は、ベテリアン大祭におけるベテリアン大乘派と異教徒・異派の間での「論難反駁」の寓話版をとらえることができる。

5.6. living from と菜食の関係

賢治は「ベテリアン大祭」において、食品の①消化性の良し悪しと、②美味しさについて、物としての性質としてではなく、食べる側の立場から論じている。消化性については、病弱者、老衰者、嬰兒による相違に言及している。そして美味しさについては、「対象よりはその感官自身の精粗」によるとして、もしパンがライ麦のものならばライ麦のいい所を感じて喜び、水を呑んでも石炭の多い水、炭酸の入った水、冷たい水、又川の柔らかな水みなしづかにそれを享受することができて、清らかな透明な限りのない愉快と安静とが、菜食にあると論じる。このように菜食により、食欲とは異なる「喜び」がわかるようになると主張される。

エマニュエル・レビナス (1906-1995) は、家庭において、よい味噌汁、空気、光、光景、思考、睡眠、庭仕事、大工仕事、針仕事など、日常生活の諸活動を、手段や目的とするのではなく、それらを楽しんで、それらを味わって生きること、そこに喜びの独立、楽しみ目の独立が示されることを“living from” (enjoyment、喜び) と表現する。⁹⁾ 菜食により、食欲とは異なる「喜び」がわかるようになるとの記述は、レビナスの“living from” (enjoyment、喜び) に相当すると思われる。そうであれば、infinity (無限) の世界に参入できる前提条件としての内面的自我の形成とその自我における“living from” (enjoyment、喜び) の経験に菜食が道を開くことを示唆することになる。内面的自我は、家庭の中で、ホスピタブルなウェルカムな誰か、居ると同時につつましく身を引いている他者 (女性性) とともにいる親密さにつつまれて、孤独なしかし人間的な世界の中で親密な回想が生み出されている自我状態である。この内面的自我における“living from” (enjoyment、喜び) の経験を容易にするという意味において、「多くの宗教で肉食を禁ずることが大切な儀式にはつきものになっている」という「ベテリアン大祭」における菜食主義者の主張をとらえる

ことができる。

5.7. 生物連続に対する陳氏の反論

「ベテリアン大祭」で「動物と植物との間には確たる境界がない」という生物連続に対する反論が描かれている。この反論の描写の2つの特徴について述べる。第一の特徴は、生物連続に対する反駁演説が中国人の陳氏によってなされたことである。なぜ陳氏なのか。この時まで腕を拱いてじっと座っていた陳氏がいきなり立って行ったことは、「私の愕いたこと」であったと描写されているように、それは陳氏の心の深いところからの反応である。しかし陳氏は落ち着いて流暢な英語で反駁演説をはじめたことは、述べる反論の内容が感情に関することであることから冷静に落ち着いて主張される必要があったことを示している。

第二の特徴は、理論上いくら連続していても、太陽スペクトルの七色のように、その両端では大分違っているとする常識による視点の保持にある。そしてこの常識による視点は、「本心から起ってくる哀憐の感情」、「本心から起こってくる気持ち」を論拠とする視点である。賢治は、「春と修羅」の序において、「わたくしといふ現象」は「仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明」であり、「春と修羅」に表現されていることは、「わたくしといふ現象」の「そのとほりの心象スケッチ」であると述べている。そして「そのとほりの心象スケッチ」における「そのとほり」とは、「本心から起ってくる哀憐の感情」、「本心から起こってくる気持ち」の「本心から」ということである。賢治は理論上連続しているという主張に対して、「本心から起こってくる気持ち」においては「両端」では大分違おうと主張する。

この「両端」において、賢治は東洋哲学における「陰陽」を想定しているように思われる。賢治は、現象についての「本心から起こってくる気持ち」を「陰陽」としてとらえていたように思われる。そのひとつの根拠が、「わたくしといふ現象」を「有機交流電燈のひとつの青い照明」ととらえる視点である。1931年の東北砕石工場主の鈴木東蔵あての書簡の文末に「先はいづれも甚面白からぬ御報のみながらいづれ陰陽は交代し晴雨は循環致すべく次便を御待ち奉願候」とある。1933年の森佐一あての書簡に、

「易の



といふ原理面白く思ひます。みんなが「吉」だと思つてゐるときはすでに「吝」へ入つてゐてもう逆行は容易でなく、「凶」を悲しむとき

すでに「悔」に属し、明日の清楚純情な福德を約するといふ科学的にとてもいいと思ひます。希つて常に凶悔の間に身を処するものは甚自在であると思つたりします。古風な点お笑ひ下すつてかまひません。」とある。賢治が中国人の陳氏に落ちて着いて流暢な英語で反駁演説させたことには、易における陰陽の視点が「明日の清楚純情な福德を約するといふ科学的にとてもいい」と思う賢治の思ひが込められているのかもしれない。

5.8. 概念的思考に基づく根拠への反論

成人の歯は、植物を擦り砕くための臼歯、食物を噛み取るための門歯（切歯）のほか、肉を裂くための犬歯を含むことから、人類に混食が一番自然であり一番適当であるという比較解剖学の見地からの意見に対して、自然であることにはよいことと悪いことの両方があるという反論がなされる。歯の比較生物学的見地は、1896年に刊行された石塚左玄による化学的食養長壽論⁷⁾に述べられている見解であり、賢治はそれを踏まえて述べている。反論においては、比較解剖学の見地からの概念的思考による「自然である」との判断は、「本心から起こってくる気持ち」とは異なるがゆえに退けられる。

また「本心から起こってくる感情」、「本心から起こってくる気持ち」、「そのとほりの心象」に根拠をおく立場は、同様に、現象は総て神の摂理中なるが故に善なりとする判断についても、概念的思考に基づく根拠であるが故に退ける。

5.9. あらゆる生物への愛と慈悲

動物が可哀そうだから食べないというベヂタリアン同情派およびベヂタリアン大乘派の「本心から起こってくる哀憐の感情」、「本心から起こってくる気持ち」は、「畢竟根のない木」、「結局自分に気持ちがいいという丈の事」であるとの見解に対して、日本の信者一同を代表して列席していた「私」の特異な反応が描写される。頭がフラツとし、まるでよろよろ出て行き、何を云うんだと思つたときはもう演壇に立ってみんなを見下していた。そ

して一番向うでしきりに拍手をしている陳氏のほか、みんなはまるで野原の花のやうに見えたと描写する。

賢治は「春と修羅」を「そのとほりの心象スケッチ」であればこそ「心象スケッチ」といったように、動物が可哀そうだから食べないというベヂタリアン同情派およびベヂタリアン大乘派の「本心から起こってくる哀憐の感情」、「本心から起こってくる気持ち」は、私の「そのとほりの心象」であった。ここにおいて「春と修羅」の序に述べられた「わたくしといふ現象」による「そのとほりの心象スケッチ」を「畢竟根のない木」と否定されたときの「私」の心的状態とは、まぎれもなく賢治自身のものである。

6. 聖い資糧

1922年11月27日、みぞれのふる寒い朝、賢治の大事な信仰の道連れで、歌稿を清書してくれた妹トシが24歳で亡くなる。大きな衝撃を受けた賢治は、亡くなった妹トシとの交信を求めて、1923年8月に青森・北海道経由で樺太旅行に出て、1924年4月に、「無声慟哭」と「オホーツク挽歌」を含む「春と修羅」を自費出版する。「永訣の朝」は、5つの心象スケッチよりなる「無声慟哭」の最初におかれた心象スケッチである。

6.1. 永訣の朝の構成

「永訣の朝」は、あたかも末期の水を頼む妹トシの言葉「あめゆじゆとてちてけんじや（あめゆきとつてきてください）」に呼応して、賢治が馳走する姿で始まる。

青い^{じゆんさい}専菜のもやうのついた
これらふたつのかけた^{たうわん}陶碗に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたしはまがつたてつぼうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした

続いて妹トシの依頼の意図とそれに呼応する賢治の決意が語られる。

死ぬといふいまごろになつて
わたしをいつしやうあかるくするために
こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから

賢治の「末期の水」をとる姿が描かれる。

銀河や太陽、気圏などよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを…

すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう

わかれゆく妹をいとおしむ賢治の心と妹の姿が
描かれる。

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あああのときされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ

「末期の水」の雪のうつくしさと妹トシの再生の
決意のうつくしさ（またひとにうまれてくるときは
こんなにじぶんのことばかりで くるしまないやうに
うまれてきます）に、賢治の祈りと願いの決意が語られる。

あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

6.2. 末期の水

末期の水は、臨終の積尊による水の求めに対して、弟子や鬼神が馳走して水をさきげたという仏典に基づく習慣であり、広く現在に伝わっている行為である。臨終の妹トシの雨雪をとつて来てくださいという要望に曲がった鉄砲玉のように馳走してそれを捧げた行為は、仏典に描かれた末期の

水の故事の枠組における行為に矛盾しない。しかし「永訣の朝」には従来の末期の水にはなかった新たな要素がある。それを列挙すると、①妹トシが求めたのは水ではなく美しい雪（あめゆき）であること、②すきとおるつめたい雫にみちたつややかな松の枝からもらう雪であること、③賢治が捧げたのはひと椀ではなくふた椀の雪であること、④妹トシが食べるふた椀の雪が天上のアイスクリームになって妹トシとみんなに「聖い資糧」をもたらすように祈り願ったこと、である。

賢治が捧げたのはなぜひと椀ではなくふた椀の雪であったのか。心象スケッチにおいて、「あめゆきとつてきてください」との妹トシの依頼に対して、賢治が雪をとつて来たのは、青い蓴菜の模様のついた「これらふたつのかけた陶椀」、兄妹としていっしょに育ってきた間に見慣れた茶碗であった。つまり賢治は妹トシと見慣れたいつもの茶碗でいっしょに最後の「食事」をすることを意図した。そしてそれが最後の共食であるためには、水ではなく椀に盛られる雪でなければならなかった。

6.3. 転調

賢治は妹トシが食べる雪に、「おまえがたべるこのふたわんのゆきに わたしはいまこころからいのる」という。妹トシが食べるふた椀の雪、これはどういうことか。妹トシが最後のひと椀を食べ、賢治が自分のすべての幸いをかけて願うのは、もうひと椀の雪が天上のアイスクリームになって「おまへ（注：妹トシ）とみんなに聖い資糧をもたらすやうに」であった。賢治は最愛の妹に末期の水を捧げることを通じて、賢治の意識は妹とみんなに展開してゆく。

6.4. 聖い資糧

「みんな」とそれと密接に関連する「聖い資糧」とは何なのか。「みんな」は賢治もふくまれる「みんな」であるが、その範囲は何か、家族なのか、人類なのか、あるいはもっとひろい世界の「みんな」なのか。

賢治の願いは、「銀河や太陽、気圏などよばれたせかいの そらからおちた雪」のひと椀が「天上のアイスクリーム」になって「聖い資糧」をもたらすことである。言い換えると「天上のアイスクリーム」は、雪が昇華して「銀河や太陽、気圏などよばれたせかい」にて生まれ変わった「ア

アイスクリーム」のことであり、この「天上のアイスクリーム」から落ちてもたらされる雪が「資糧」であり、それゆえに賢治は「聖い資糧」と呼んだのだと思う。宮澤家本の「春と修羅」における「永訣の朝」では、「どうかこれが天上のアイスクリームになつて」は「どうかこれが兜率の天の食に変わつて」となっている。この推敲の結果は、「天上のアイスクリーム」が、釈迦入滅から56億7000万年後の未来の世に仏となってこの世にくだり衆生を救済するという弥勒菩薩が住する兜率天の食を意味していることを示す。このことから「聖い資糧」がもたらされる対象である「みんな」とは、「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」の「みんな」、言い換えると化石を生み出してきた過去から未来永劫までの4次元の宇宙全体の「みんな」である。

賢治は、4次元の宇宙全体の「みんな」の有機的な存在を意識していた。「春と修羅」の序において、「人や銀河や修羅や海膽は 宇宙塵をたべ、または空気や塩水を呼吸しながら それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが それらも畢竟こゝろのひとつの風物です」と述べ、人や銀河など宇宙の諸要素「みんな」が宇宙塵を食べ、または呼吸すると述べる。

人や自らをそうであると認識する修羅、銀河という膨大な存在から海鼠という下等な生物まで、宇宙塵を食べるとはどういうことだろう。食べるとは、食べた物を分解して自らを養うことである。星などの宇宙の構成要素の分解物であろう宇宙塵をみんなが食べることによってみんなが有機的な新陳代謝を行うことを通じてお互いに関連しあっているという宇宙観を抱いていたのであろう。「天上のアイスクリーム」から落ちてもたらされる「聖い資糧」は、宇宙塵を食べるように宇宙のみんなに共有されるはずである。賢治はそのような祈りと願いを本当に抱くことができた。「聖い資糧」は、自らの向上を資け養う糧を意味する魂の食であるということが出来る。

賢治のこの心象スケッチは、物質としての食べ物が魂の食になるための条件を示していることとらえることも可能である。それは、①食べ物としてどれほど美しくてもそれを食べること自体では決して魂の食にはならないこと、②美しい食べ物はおそろしい源に由来することを知ること（「あんなおそろしいみだれたそらから」きた「このうつく

しい雪」）、③受食者に捧げるために作食者は利己心を去って馳走し工夫すること、④受食者に食べ物を捧げるに際して、作食者はそれが受食者とみんなに「聖い資糧」をもたらしように心から祈り、自分のすべての幸いをかけて願うこと、である。

賢治は末期の水という臨終の習慣に革命的に新たな意味を賦与したということが出来る。賢治は、自らの活動が「天上のアイスクリーム」となって妹とみんなに「聖い資糧」をもたらしように心から祈り、自分のすべての幸いをかけて願うことを「永訣の朝」において公表することで、「聖い資糧」をもたらし実践への決意を表明した。

7. おわりに

Hoyt Long は、近代日本の東京中心の西洋化の進展の中で、新しい首都と旧い地方の間の地理的格差において一人の主体が地域作りにおいて果たし得る役割、すなわちより新しいアイデアとより新しい戦略の種を、宮澤賢治を通じて学ぶことの意義を強調している。⁸⁾ 宮澤賢治という「わたくしといふ現象」は、「本心から起ってくる哀憐の感情」、「本心から起ってくる気持ち」を生み出す「有機交流電燈のひとつの青い照明」であるととらえることが出来る。そこから生み出された「そのとほりの心象スケッチ」は、結果として概念的に陰陽と把握されることである。そうならば宮澤賢治を通じて学ぶべきことは、形式論理の代わりに古い東洋の概念的な陰陽の把握を復活させることではない。それは現象の陰陽をそのとおりの心象スケッチとして把握することを可能にする新たな哲学の方法である。

8. 要約

本論は、食についての見解すなわち食事観という発光点より照射された光によって照らだされ浮びあがる宮澤賢治のシルエットを記述する試みであった。食われる魚鳥獣の心持ちが感ぜられた賢治の感性が賢治を菜食への決意に導いた。賢治は本心から起ってくる感情、本心から起ってくる気持ち、そのとおりの心象から出発し、概念的思考の結果を行為の規範にはしなかった。そして賢治は、現象についての本心から起ってくる気持ちを陰陽の変化としてとらえていた。賢治は最愛

の妹に末期の水を捧げた過程を記した永訣の朝の公表を通じて、自らの活動が天上のアイスクリームとなって妹とみんなに聖い資糧をもたらすように心から祈り、自分のすべての幸いをかけて願い、その聖い資糧をみんなにもたらすことを一生の使命とする決意を表明した。宮澤賢治を通じて学ぶべきことは、形式論理の代わりに古い東洋の概念的な陰陽的把握を復活させることではない。それは現象の陰陽をそのとおりの心象スケッチとして把握することを可能にする新たな哲学の方法である。

引用・参考文献

- 1) Hiroaki Sato. Introduction. In: Miyazawa Kenji: selections. University of California Press; Berkeley and Los Angeles: 2007, pp.2-3.
- 2) 宮澤清六. 兄賢治の生涯. In: 兄のトランク. 筑摩書房; 東京: 1987, pp.213-239.
- 3) 宮澤清六, 他編. 新校本宮澤賢治全集. 第16巻(下) 補遺・資料 年譜篇. 筑摩書房; 東京: 2001.
- 4) 宮澤清六. 極東ビザテリアン大会秘録. In: 兄のトランク. 筑摩書房; 東京: 1987, pp.170-181.
- 5) 宮澤賢治. 1931年極東ビザテリアン大会見聞録. In: 新校本宮澤賢治全集. 第10巻 童話III 本文篇. 筑摩書房; 東京: 1995, pp.338-343.
- 6) Emanuel Levinas. Totality and Infinity: an Essay on Exteriority. Trans, Alphonso Lingis. Duquesne University Press; Pittsburg: 1969.
- 7) 石塚左玄. 化學的食養長壽論. 博文館; 東京: 1896.
- 8) Hoyt Long. In: On Uneven Ground: Miyazawa Kenji and the Making of Place in Modern Japan. Stanford University Press; Stanford: 2012.